

# 東北アジアにおける温帯性新石器文化の 北方拡大と適応の限界（Ⅰ）

—北海道宗谷地方における縄文時代遺跡群の実態調査 2019 年度成果報告書—

Северные границы распространения и адаптация неолитического  
населения в умеренном поясе Северо-Восточной Азии

Том I:

Исследование археологических памятников Дзёмон в регионе Соя, о-в Хоккайдо, 2019

日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（B）  
課題番号 18H00739 研究成果報告書

東京大学常呂実習施設研究報告 第 17 集



研究代表者 福田正宏（東京大学大学院人文社会系研究科 准教授）

令和 2（2020）年 4 月

東京大学大学院人文社会系研究科

考古学研究室

附属北海文化研究常呂実習施設



NORTHERN EXPANSION OF  
TEMPERATE NEOLITHIC CULTURE IN NORTHEAST ASIA  
AND ADAPTATION LIMITATIONS  
VOLUME I:

RESEARCH OF JOMON ARCHAEOLOGICAL SITES  
IN THE SOYA REGION, HOKKAIDO, 2019

EDITED BY  
MASAHIRO FUKUDA &  
HANNA HAGINO

2020

DEPARTMENT OF ARCHAEOLOGY &  
TOKORO RESEARCH LABORATORY,  
GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIOLOGY,  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

TOKYO – KITAMI, HOKKAIDO

## 例 言

- 1) 本書は、令和元（2019）年10月9日から10月16日にかけて東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室が実施した北海道稚内市における埋蔵文化財発掘調査の成果報告書である。
- 2) 調査主体は東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室であり、調査担当者は福田正宏（東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・准教授）である。
- 3) 発掘調査の参加者はⅡ章－2に記した。
- 4) 地図作成は張 恩恵（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）と萩野はな（東京大学大学院人文社会系研究科修士課程）、検出遺構および土層の作成は西村広経（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）、出土遺物の実測および製図は萩野はな（東京大学大学院人文社会系研究科修士課程）と太田 圭（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）が担当した。
- 5) 遺構の写真撮影は熊木俊朗と福田正宏が担当した。
- 6) 本書に使用した5万分の1地形図は、国土交通省国土地理院が発行した『2万5千分1地形図「稚内」、同地形図「声間』を複製・改変したものである。また、各遺跡周辺地形図は、稚内市都市整備課が作成した『稚内市都市計画基本図』を複製・改変したものである。
- 7) 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠した。
- 8) 本書で用いる方位は磁北で示す。
- 9) 本書Ⅰ章～Ⅶ章の執筆は、福田正宏、西村広経、斉藤譲一、張 恩恵、萩野はなが分担執筆した。文責は各文末尾に明記した。
- 10) 本書に掲載した調査記録および出土遺物はすべて、東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室において一時保管する。分析終了後は、稚内市教育委員会に移管する。
- 11) 遺跡の発掘調査・整理作業にあたって、以下の方々から格別のご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。  
氏江敏文、江田真毅、グリシチェンコ A. ビヤチェスラブ、佐藤宏之、中村 功、西脇対名夫、松田 功、山田 哲、ワシレフスキー A. アレクサンドル、渡邊祐子（敬称略、五十音順）
- 12) 本書の編集は、福田正宏と萩野はなが行った。
- 13) 本研究による遺跡発掘調査の内容は以下の文献でその概要を報告しているが、本書の内容が優先する。  
萩野はな・福田正宏・熊木俊朗・斉藤譲一・夏木大吾・張 恩恵・西村広経・太田 圭・國木田 大・佐藤宏之 2020「北海道宗谷地方における縄文遺跡群の実態調査（2019年度）」『第21回北アジア調査研究報告会発表要旨』同実行委員会 13-16頁
- 14) 本研究は、科学研究費補助金基盤研究（B）「東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界」（課題番号18H00739 研究代表者：福田正宏）による研究成果の一部である。

# 目次

例言

I	調査の目的	1
II	調査の要項	3
	1. 調査に至る経緯	3
	2. 発掘調査要項	3
	3. 調査体制	3
	4. 室内整理分析作業	4
III	遺跡の立地環境	5
	1. 調査遺跡群の立地	5
	2. 大沼の利用史（アイヌ文化期以降）	5
	3. 周辺の遺跡	7
IV	声間大沼丘陵第10遺跡の調査結果	9
V	恵北1遺跡の調査結果	12
	1. 遺跡の位置と調査の経過	12
	2. テストピット調査結果	14
VI	シュプントー5・6遺跡の調査結果	17
	1. 遺跡の位置と調査の経過	17
	2. テストピット調査結果（シュプントー5遺跡）	19
VII	まとめ	22
	SUMMARY	23

写真図版（PLATES）

報告書抄録

# CONTENTS

Prefatory notes and acknowledgement

I	Purpose of the investigation	1
II	Essential points of the investigation	3
	1. Process to the investigation	3
	2. List of essential points of the excavation	3
	3. Organization	3
	4. Laboratory investigation	4
III	Site location	5
	1. Location of the sites investigated in 2019	5
	2. History of human activities after the Ainu Culture around Lake Onuma, Wakkanai City	5
	3. Archaeological sites of the surrounding area	7
IV	Results of the excavation at the Koetoi-onuma-kyuryo 10 site	9
V	Results of the excavation at the Keihoku 1 site	12
	1. Site location and process of the excavation	12
	2. Results of the surveys of test pits at the Keihoku 1 site	14
VI	Results of the excavation at the Shupunto 5 and 6 sites	17
	1. Site location and process of the excavation	17
	2. Results of the surveys of test pits at the Shupunto 5 site	19
VII	Conclusion	22
	Summary	23

Plates

# I 調査の目的

東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室（以下、東京大学考古学研究室と略）は、これまで、ハバロフスク地方郷土誌博物館、サハリン国立大学などとの日露国際共同研究を通じて、新石器／縄文時代～中世・オホーツク文化期の間宮海峡周辺地帯（北海道・サハリン島・アムール下流域）における先史文化交流史を通時的に解明してきた（熊木・福田 2005、福田ほか編 2011・2014、Шевкомуд и др. 2015 など）。また、東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設（以下、東京大学常呂実習施設と略）、サハリン国立大学との連携関係のもと、道東オホーツク海沿岸における縄文時代早期・石刃鏃文化、中世・オホーツク文化の遺跡の調査研究を続けてきた（宇田川・熊木編 2003、熊木・國木田編 2012、福田編 2015、熊木編 2015、Грищенко и др. 2017 など）。これらの古代文化は、サハリン島やロシア大陸と関係があるとされてきたものである。

北海道北端部に位置する稚内市は、道東とサハリン島の間中に位置し、旧石器時代～アイヌ文化期の北海道－サハリン間における文化交流史を考える上で重要な位置を占める。日露二国における調査研究を進めるなか、旧来の学問的枠組みでは解決することの難しい考古学的諸問題が浮き彫りになってきた。日露国境線を跨ぐかたちで、宗谷海峡周辺の考古学的諸現象を調査し直す必要がある。

北海道宗谷地方における遺跡のうちとくに縄文時代の遺跡に関しては、断片的な情報しかない。そのため、周知の埋蔵文化財情報のみにもとづいた議論には限界がある、と指摘されてきた（新美 2019 など）。また、これまで集められている限られた遺跡情報を見渡すかぎり、縄文時代のすべての時期において、宗谷地方全域が居住不適地であったとみなす根拠はないし、宗谷海峡が大きな障壁となり集団間の交渉が遮られたと考えることには無理があるようにも思われる。道東北には、土器出現期以降、列島縄文文化の北方適応形態が認められる（福田 2018）。その実像に迫るためには、見かけ上で希薄な遺跡分布と、当地を占拠するメリットやデメリットを背景とした社会集団による居住・活動史の実態とを見極めなければならない。

そこで、サハリン島で現在実施している新石器時代遺跡群の調査と並行して、サハリン島に最も接近する位置にある稚内市内で、縄文時代を主たる調査対象とした遺跡群の実態調査を開始することにした。ここでは、周知遺跡群の性格・時期特定を目的とした範囲確認調査を実施するとともに、宗谷海峡形成後の遺跡分布・堆積環境を広域的に調査し、本地域における遺跡形成史と生活環境の変化を再現することを目指したい。

(福田正宏)

## 引用文献

- 宇田川 洋・熊木俊朗編 2003 『居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究』東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- 熊木俊朗・福田正宏編 2005 『間宮海峡先史文化の復元と日本列島への文化的影響』東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設・ハバロフスク州郷土誌博物館
- 熊木俊朗・國木田 大編 2012 『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学大学院人文社会系研究科
- 熊木俊朗編 2015 『トコロチャシ跡遺跡群（史跡常呂遺跡）整備に伴う発掘調査報告書』東京大学大学院人文社会系研究科・

## I 調査の目的

北見市教育委員会

新美倫子 2019 「北海道北部における縄文時代遺跡の分布について」『旧石器時代文化から縄文時代文化の潮流』六一書房  
461-470 頁

福田正宏 2018 「縄文文化の北方適応形態」『国立歴史民俗博物館研究報告』208、9-44 頁

福田正宏編 2015 『日本列島北辺域における新石器／縄文化のプロセスに関する考古学的研究』東京大学大学院新領域創成  
科学研究科社会文化環境学専攻・東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設

福田正宏・シェフコムード・内田和典・熊木俊朗編 2011 『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程  
の研究』東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設

福田正宏・シェフコムード・森先一貴・熊木俊朗編 2014 『環日本海北回廊の考古学的研究（I）』東京大学大学院人文社  
会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設

Грищенко В.А., Фукуда М., Василевский А.А., Онуки Ш., Сато Х., Куникита Д., Можаяв А.В., Перегудов А.С., Пашенцев П.А.,  
Учида К., Морисаки К., Якушиге М., Натсуки Д., Ямашита Ю. 2017. Новые исследования Поселения Адо-Тымово 2  
(результаты работ совместной российской-японской экспедиции 2014, 2015 гг.). *Археология Circum-Pacific*, С.136-142.  
Тихоокеанское издательство «Рубеж», Владивосток.

Шевкомуд И.Я., Фукуда М., Онуки С., Сато Х., Кумаки Т., Куникита Д., Учида К. 2015. К проблеме раннего неолита в Нижнем  
Приамурье: результаты исследования поселения Ямихта. *Первобытная археология Дальнего Востока России и смежных  
территорий Восточной Азии: современное состояние и перспективы развития*, С. 11-32. ИИАЭ ДВО РАН, Владивосток.

## II 調査の要項

### 1. 調査に至る経緯

令和元（2019）年度の現地調査の実施に先立ち、福田正宏（東京大学考古学研究室 准教授）が調査代表者となり、稚内市教育委員会との事前協議を重ね、調査の目的と方法に関する申し合わせを行い、稚内市声問地区に所在する5遺跡（恵北1遺跡、声問大沼丘陵第10遺跡、シュプントー4遺跡、シュプントー5遺跡、シュプントー6遺跡）を調査候補地として選択した。その後、土地地権者・占有者からの承諾を受け、令和元（2019）年8月1日付けで北海道教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の届出を提出した。この届出は同月30日付けで受理された。

以上の手続きを経て、令和元（2019）年10月9日から現地調査を実施した。

### 2. 発掘調査要項

**埋蔵文化財名** 恵北1遺跡（登載番号 H-01-9）

所在地：北海道稚内市大字声問村字下声問 1465-1・6

声問大沼丘陵第10遺跡（登載番号 H-01-134）

所在地：北海道稚内市大字声問 4067-1、986-2、6898-3

シュプントー4遺跡（登載番号 H-01-127）

所在地：北海道稚内市大字声問村字声問 6899-1

シュプントー5遺跡（登載番号 H-01-128）

所在地：北海道稚内市大字声問村字声問 6899-1

シュプントー6遺跡（登載番号 H-01-129）

所在地：北海道稚内市大字声問村字声問 6899-1

**発掘調査目的** 学術研究

**発掘調査面積** 計 30m<sup>2</sup>

（恵北1遺跡：7m<sup>2</sup>、声問大沼丘陵第10遺跡：7m<sup>2</sup>、シュプントー4遺跡：0m<sup>2</sup>、同5遺跡：14m<sup>2</sup>、同6遺跡：2m<sup>2</sup>）

**発掘調査期間** 令和元（2019）年10月9日～10月16日

**出土文化財の名称及び数量** 土器・石器など 1箱（内寸 34cm×54cm×7cm）

### 3. 調査体制

今年度の発掘調査は、以下の体制で実施した（所属は調査時）。

**調査主体** 東京大学考古学研究室（福田正宏）

**調査担当者** 東京大学考古学研究室 准教授 福田正宏（調査代表者）

**調査参加者** 東京大学常呂実習施設 教授 熊木俊朗（共同研究者）

## II 調査の要項

東京大学常呂実習施設 助教 夏木大吾

東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター 特任助教 國木田大

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程 大学院生 張 恩恵

同 西村広経

同 太田 圭

東京大学大学院人文社会系研究科修士課程 大学院生 萩野はな

稚内市教育委員会教育総務課文化振興グループ 主査 斉藤譲一

**調査協力者** 東京大学考古学研究室 教授 佐藤宏之

サハリン国立大学ロシア・世界史学部 教授 ワシレフスキーA. アレクサンドル

サハリン国立大学ロシア・世界史学部 准教授 グリシチェンコ A. ビヤチェスラブ

### 4. 室内整理分析作業

発掘調査完了後、出土資料は東京大学考古学研究室に移動し、調査参加者が協力して発掘資料および図面・記録類の整理・分析を行った。出土遺物の整理・分析は萩野・太田、調査時に記録した遺構・層位などの図面・データ類の整理・解析は張・西村が中心となって進めた。

出土資料は、稚内市教育委員会との申し合わせにもとづき、整理分析が完了した後に稚内市へ一括返還する。

(福田正宏)

### Ⅲ 遺跡の立地環境

#### 1. 調査遺跡群の立地

今年度の調査地は、稚内市声問地区の恵北1遺跡、声問大沼丘陵第10遺跡、シュプントー4遺跡、シュプントー5遺跡、シュプントー6遺跡である。現況は、声問大沼丘陵第10遺跡が社会福祉法人緑ヶ岡学園の敷地内、そしてそれ以外が稚内市の保有する原野となっている。なお、シュプントー遺跡群のうちシュプントー4遺跡に関しては、下草が密生するため立ち入ることが叶わず、調査対象地から外すことにした。

これらの遺跡群は、完新世の海跡湖である大沼の周辺に分布する（第1図参照）。大沼の周辺低地には、主として縄文海進以降の相対的海水準変動によって発達した泥炭層が広く分布している。現在、軟弱地盤の大部分は造成がなされているが、湿原堆積物の一部はメグマ沼自然公園において植生とともに保存・活用されている。

大沼は海岸砂丘列を挟んで、宗谷湾を北に臨む。南は、大沼に流れ込むサラキトマナイ川と声問川が沖積低地（幕別平野）を形成し、その周囲を更新世段丘が取り囲む地形景観にある。大平・海津（1999）によれば、縄文海進最盛期（約6,000 BP：未較正<sup>14</sup>C年代、以下同じ）の大沼と幕別平野が含まれる大沼周辺は内湾環境にあった。その後、約3,600～2,600 BPと約1,600 BP以後の相対的海水準低下期などを経て、徐々に陸地化していった。

恵北1遺跡とシュプントー遺跡群は、礫・砂・粘土からなる更新世段丘（小山内ほか1959参照）の縁辺部に位置している。両遺跡とも、河川や湿原を眼下に見下ろす位置にある。一方、声問大沼丘陵第10遺跡は、声問地区の南にある更新世段丘（声問大沼丘陵）の北側直下となる標高5～6m前後の低い平坦面に位置しており、その他の遺跡群とは立地条件が異なっている。（福田正宏）

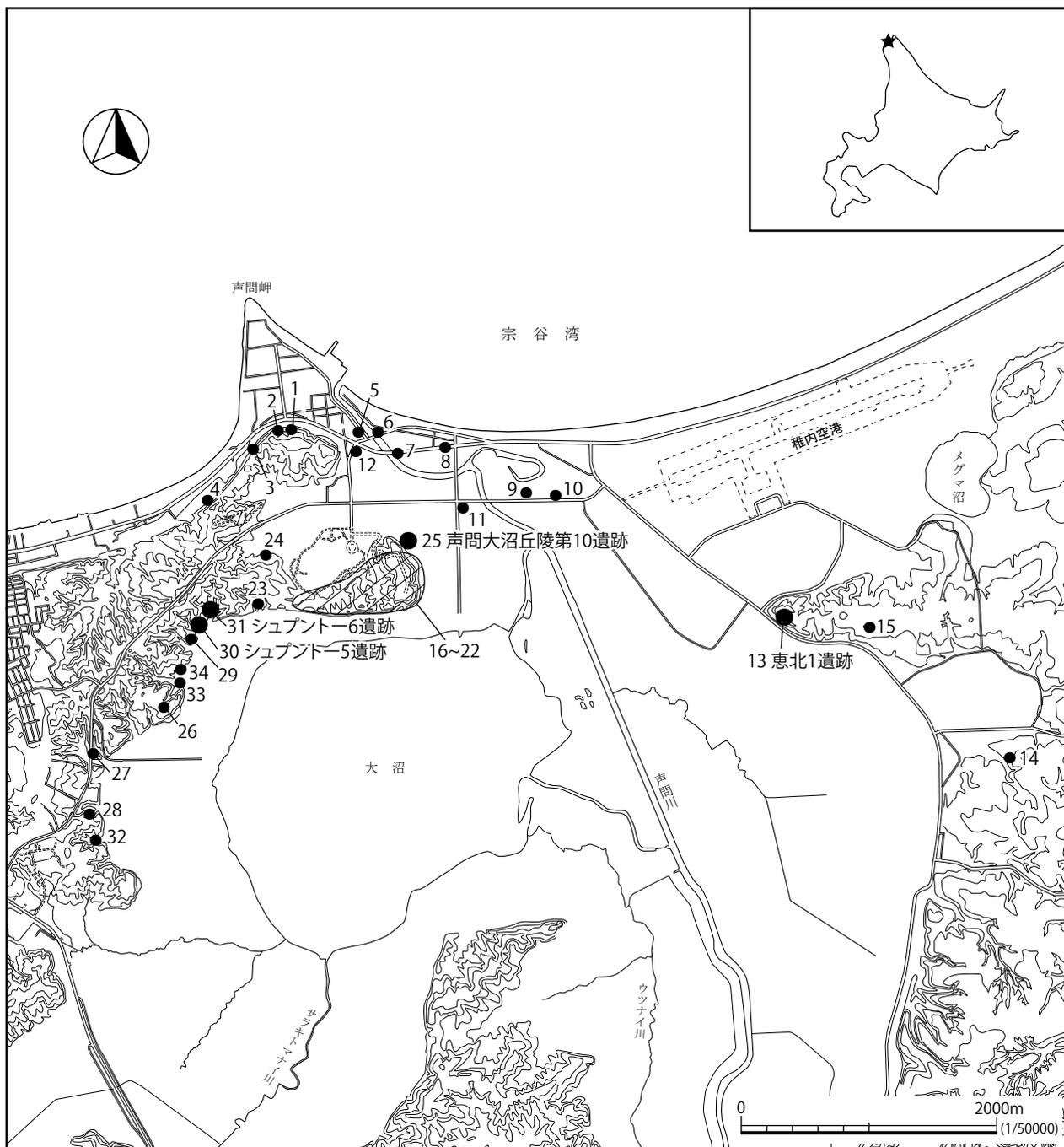
#### 2. 大沼の利用史（アイヌ文化期以降）

大沼は、稚内市街地から南西へ約6km離れた声問地区に位置する、広さ約480ha、市域最大の沼である。大沼はもともと、アイヌ語で「ウグイのいる沼」の意味にあたる「シュプン・トー」と呼ばれており、汽水性のこの沼にはイトウなどの淡水魚のほか、カレイなど海水魚も生息している。

戦前の大沼は、幕別川、サラキトマナイ川の2河川が主として流入し、声問川をもって宗谷湾に連絡していた。下流域は、河川の蛇行の繰り返しにより、湿原がひろがる状況であった。また戦時中は、旧海軍の水上飛行部隊の基地として使用されたこともあった。（稚内市百年史編さん委員会1978）。

戦後になると、昭和20（1945）年に食料自給および失業者救済を目的とした「緊急開拓事業実施要領」が閣議決定されたのを契機に、樺太、満州からの引揚者たちが北海道にも多数入植した。稚内においても引揚者たちの増加にともない声問川流域における融雪洪水の防御、湿地の農耕地化、排水路確保のための河川改修が必要となった。昭和28（1953）年には、声問川が特殊河川に指定され、本格的な改修工事が開始され、昭和36（1961）年には、声問川と幕別川をつなぐ捷水路工事によって大沼から両河川が切り離され、幕別川が直接声問川に接続されたことにより、かつての幕別川を含めた全域が声問川と呼ばれるようになった。

また戦後における人口増加に伴い、給水量不足が生じたため新たな水源の確保が急務となった。水源に関する調査の結果、市街地に近い大沼が選定され、昭和39（1964）年から大沼が水道水源として利用されることとなっ



第1図 調査遺跡と周辺の遺跡（等高線は10m間隔）

た。しかし昭和43（1968）年頃から、大沼における富栄養化により藻類の繁殖が著しく水質悪化が問題となったのに加えて、市内における水産加工用水量の増加もあり、大沼以外での水源確保が必要となった。市は、大沼より良質で安定的な水源を確保するため、声問川の支川であるタツニウシュナイ川に北辰ダム建設し、昭和57（1982）年からは同ダムから水道用水が供給され現在に至っている。（稚内市史編さん委員会1999）。

一方において声問川流域は、台風による河川の氾濫ため、たびたび河川流域に被害がおよんだ。特に昭和45（1970）年10月には、稚内測候所始まって以来の大雨による大規模な洪水により、流域の主要な道路各所が決壊し、農家、畜舎が浸水、乳牛31頭が溺死する被害が発生した。これら災害の経験を踏まえ、声問川河

第1表 稚内市声問地区および大沼周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在	時代	種別	番号	遺跡名	所在	時代	種別
1	声問丘陵下第1遺跡	声問	擦文	集落跡	18	声問大沼丘陵第3遺跡	声問	擦文	集落跡
2	声問丘陵下第2遺跡	声問	擦文	集落跡	19	声問大沼丘陵第4遺跡	声問	擦文	集落跡
3	声問丘陵下第3遺跡	声問	統縄文、擦文	集落跡	20	声問大沼丘陵第5遺跡	声問	擦文	集落跡
4	声問丘陵下第4遺跡	声問	擦文	集落跡	21	声問大沼丘陵第6遺跡	声問	擦文	集落跡
5	声問川左岸1遺跡	声問	統縄文	遺物包含地	22	声問大沼丘陵第7遺跡	声問	不明	集落跡
6	声問貝塚	声問	オホーツク	貝塚	23	声問大沼丘陵第8遺跡	声問	統縄文	遺物包含地
7	声問川右岸1遺跡	声問	統縄文	配石遺構	24	声問大沼丘陵第9遺跡	声問	擦文	集落跡
8	声問川右岸2遺跡	声問	アイヌ	遺物包含地	25	声問大沼丘陵第10遺跡	声問	縄文	遺物包含地
9	声問川大曲遺跡	声問	統縄文、縄文	集落跡	26	シュプントー遺跡	声問	擦文	集落跡
10	声問川大曲第2遺跡	声問	擦文	集落跡	27	シュプントー2遺跡	声問	擦文	集落跡
11	声問川左岸2遺跡	声問	擦文	集落跡	28	シュプントー3遺跡	サラキトマナイ	擦文	集落跡
12	声問川左岸3遺跡	声問	統縄文	遺物包含地	29	シュプントー4遺跡	声問	縄文	遺物包含地
13	恵北1遺跡	下声問	擦文、縄文	集落跡	30	シュプントー5遺跡	声問	縄文	集落跡
14	恵北2遺跡	下声問	統縄文、擦文	集落跡	31	シュプントー6遺跡	声問	統縄文	遺物包含地
15	恵北3遺跡	下声問	縄文	遺物包含地	32	シュプントー7遺跡	サラキトマナイ	擦文	集落跡
16	声問大沼丘陵第1遺跡	声問	擦文	集落跡	33	シュプントー8遺跡	声問	擦文	集落跡
17	声問大沼丘陵第2遺跡	声問	擦文	集落跡	34	シュプントー9遺跡	声問	擦文	集落跡

口における市街地の洪水被害を防止・軽減するため大沼を活用し、洪水調整を行う大沼遊水地が計画された。具体的には、大沼水門、越流堤、周囲堤防などの施設整備が実施され、平成21(2009)年に完成した。

以上のとおり、戦後において大沼は、市街地への水源として活用されたほか、大雨による洪水に対して遊水地としての役割を担うため、幕別川および声問川の河川改良および大沼の整備事業が実施されている。また大沼周辺は、昭和49(1974)年に北海道の自然保護景観地域に指定され、近年は春と秋には白鳥が飛来するほか、周辺にはオジロワシの繁殖、コウノトリの飛来も確認されている。平成6(1994)年には、大沼に飛来する野鳥観測のため、大沼野鳥観察館が完成し、稚内市民をはじめ観光で稚内を訪れる人々に活用されている。

(斉藤譲一)

### 3. 周辺の遺跡

今年度に調査を実施した幕別平野北端部、声問川河口周辺域では、宗谷湾や大沼に面する丘陵上、声問川右岸に張り出す丘陵(幕別丘陵)の縁辺を中心に縄文時代遺跡の分布が認められる。第1図と第1表には、稚内市声問地区および大沼周辺において所在が確認されている遺跡群を掲載した<sup>1)</sup>。

大沼北西岸を取り巻く丘陵の北側縁辺、宗谷湾に突き出す声問岬の付け根には、声問大沼丘陵下第1～第4遺跡(第1図1～4)が立地する。声問川河口周辺には、声問川左岸第1～第3遺跡(同図5・11・12)、声問貝塚(同図6)、声問川右岸第1・第2遺跡(同図7・8)が立地する。

声問川右岸に残る大曲三日月湖(旧声問川)の南側に砂丘があり、その砂丘上には声問川大曲遺跡(同図9)と声問川大曲第2遺跡(同図10)が立地する。声問川大曲遺跡(種市・土肥1993)は、縄文～擦文期の遺物が出土しているが、縄文晩期後半～統縄文前期前半の遺物が圧倒的に多い。縄文時代の遺物としては、復節縄文の施された中期/後期移行期の北筒式土器、晩期後半の幣舞式土器がある。北筒式土器片は1点のみ出土しているが、先にⅢ-1で言及した大平・海津(1999)による相対的海水準変動からすると、遺跡の所在地はその当時、陸化していない可能性が高い。微地形に関する発達形成過程を再調査する必要はあるが、この土器片は上流側から供給された河川堆積物のなかに含まれていた可能性も否定することができない。過去に「声問大曲」における北筒式土器の出土が報告されているが(稚内市史編纂室1968など)、本遺跡とは地点が異なるのではないか。平成4(1992)年の稚内市教育委員会による発掘調査では、集石遺構や土坑(墓坑?)などの遺構が

### Ⅲ 遺跡の立地環境

多数検出されている（種市・土肥 1993）。その大半は、続縄文期初頭～前半に利用されたものとみられる。

大沼西岸に面した丘陵斜面にはシュプントー遺跡群（同図 26～34）、大沼北岸に面した声間大沼丘陵上には声間大沼丘陵遺跡群（同図 16～25）がひろがる。シュプントー遺跡（同図 26）には擦文期の竪穴群が残存し、うち 1 軒で 1966 年に北海道大学・稚内市教育委員会による学術調査が実施されている（飯田 1968）。シュプントー 4～6 遺跡（同図 29～31）では、剥片石器や石器製作残滓の散布が確認されている。声間大沼丘陵第 1～第 6 遺跡・第 9・第 10 遺跡（同図 16～21・24・25）は擦文期の集落跡として登録されているが、右代（1999）によると、縄文中期末～後期初頭の包含層も一部に包蔵されているようである。また声間大沼丘陵第 8 遺跡（同図 23）は、続縄文期の遺物包含地とされる。ただし、声間大沼丘陵遺跡群の分布および、そこに含まれる各遺跡の時期や性格などに関しては不明な点が多い。

声間川右岸に張り出す幕別丘陵縁辺には、恵北 1～3 遺跡（同図 13～15）が立地する。恵北 1 遺跡（同図 13）は擦文期の集落跡として知られ、竪穴住居跡 3 軒が発掘調査されている。また、縄文中期／後期移行期の北筒式土器の破片が少量出土している（大場・菅 1972）。恵北 3 遺跡（同図 15）は恵北 1 遺跡と同じく幕別丘陵縁辺（標高 35～50m 前後）にあり、ここも北筒式期の遺跡であるとされている。（西村広経・福田正宏）

#### 註

- 1) 埋蔵文化財発掘調査包蔵地情報に関しては、北海道教育庁 web サイト「北の遺跡案内 道内の埋蔵文化財包蔵地の情報」  
[https://www2.wagmap.jp/hokkai\\_bunka/Portal](https://www2.wagmap.jp/hokkai_bunka/Portal) を参照。

#### 引用文献

- 飯田 勇 1968 「昭和 42 年度の稚内市指定文化財」『そうや』2 2-4 頁
- 右代啓視 1999 「第一章 先史文化の時代」『稚内市史 第二巻』稚内市 59-107 頁
- 大場利夫・菅 正敏 1972 『稚内・宗谷の遺跡（続）』稚内市教育委員会
- 大平明夫・海津正倫 1999 「北海道北部、大沼周辺低地における完新世の相対的海水準変動と地形発達」『地理学評論』72A-8、536-555 頁。
- 小山内 熙・三谷勝利・北川芳男 1959 『宗谷および宗谷海岬（旭川一第 4 号・第 1 号）』北海道立地下資源調査所
- 種市幸生・土肥研晶 1993 『声間川大曲遺跡』稚内市教育委員会
- 稚内市百年史編さん委員会 1978 『稚内市百年史』稚内市
- 稚内市史編さん委員会 1999 『稚内市史 第二巻』稚内市
- 稚内市史編纂室 1968 『稚内市史』稚内市

## IV 声問大沼丘陵第 10 遺跡の調査結果

声問大沼丘陵第 10 遺跡は、稚内市大字声問 4067-1、986-2、6898-3 に所在する（第 1 図 25）。本遺跡の包蔵地となる社会福祉法人緑ヶ岡学園の敷地内では、過去に学園の職員や生徒たちが縄文時代のものと目される遺物を採集したという。また事前に、稚内市教育委員会が学園内で大規模造成が行われた際に遺物が出土したという知らせを受けていた。だが今日まで、遺物が出土した地点は特定されていなかった。そこで、学園職員との協議を行い、周知の包蔵地範囲内に計 7 カ所のテストピット（TP：各 1 m×1 m）を設定し、包含層の有無を調査した。

各テストピットで確認された土層堆積は、以下の通りである（テストピットの位置は第 2 図を参照）。

### TP-1

- 0 層：芝土（標高 6.3～6.1m）
- 1 層：造成土（標高 6.1～5.7m） バラスまじり
- 2 層：黒褐色砂質土（標高 5.7m 以下） 5.5m までバラスが少量まじる。遺物なし

### TP-2

- 0 層：芝土（標高 5.9～5.7m）
- 1 層：造成土（標高 5.7m 以下） 大型の角礫が群集するため、掘り下げを中止

### TP-3

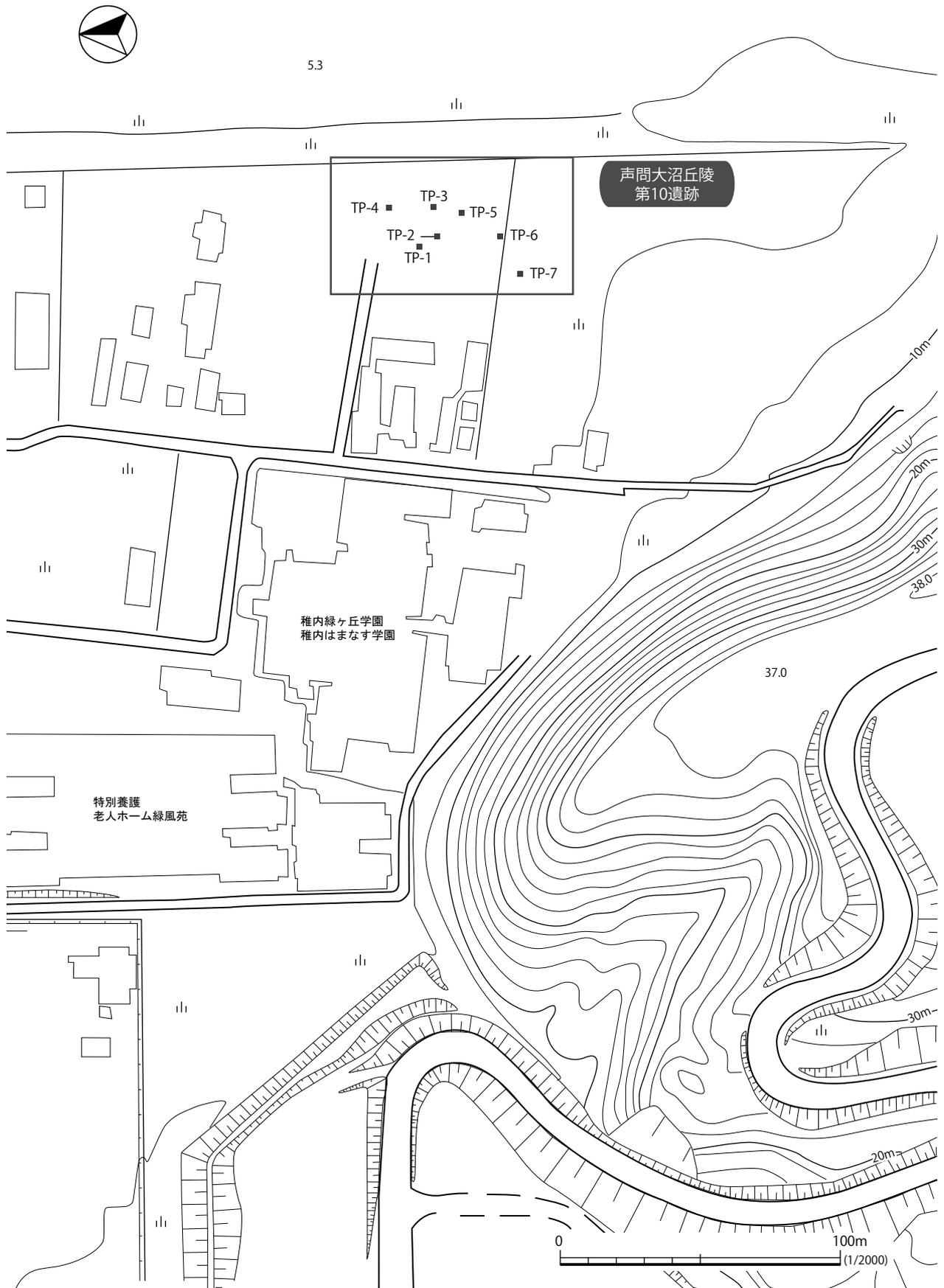
- 0 層：芝土（標高 6.2～5.9m）
- 1 層：造成土（標高 5.9～5.7m） バラスまじり
- 2 層：にぶい黄橙色細粒砂（標高 5.7～5.5m） 遺物なし
- 3 層：河川堆積物（標高 5.5m 以下） にぶい黄褐色シルト主体

### TP-4

- 0 層：芝土（標高 6.1～5.9m）
- 1 層：造成土（標高 5.9～5.5m） バラスまじり粗粒砂層。下部はバラス少
- 2 層：にぶい黄褐色土（標高 5.5m 以下） シルト混じり。遺物なし。下部層の一部が巻き上げられたもの

### TP-5

- 0 層：芝土（標高 5.4～5.2m）
- 1 層：泥炭（標高 5.2～5.0m） TP-6 の 2 層と共通。下部は 2 層への漸移層
- 2 層：灰黄褐色シルト（標高 5.0～4.7m） 有機物・角礫まじり
- 3 層：暗灰褐色シルト（標高 4.7～4.5m） 水分量多
- 4 層：河川堆積物（標高 4.5m 以下） 円礫が群集



第2図 大沼丘陵第10遺跡周辺の地形図（等高線は2m間隔）

#### TP-6

- 0層：芝士（標高 5.7～5.5m）
- 1層：泥炭（標高 5.5～5.3m） 2層に比べて有機物が多く含まれる
- 2層：泥炭（標高 5.3～4.8m） TP-5の1層と共通
- 3層：暗灰褐色シルト層（標高 4.8m以下） 水分量多

#### TP-7

- 0層：芝士（標高 6.1～5.9m）
- 1層：造成土（標高 5.9～5.7m） 粉碎されたバラスが少量まじる
- 2層：泥炭（標高 5.7m以下）

上記テストピット7カ所のうち、調査区域内全域に通じる基本層序がすべて確認された地点はない。ただし全体として、標高 6.1～5.5m の造成土の下に泥炭や河川堆積物が存在することを確認した。これらは完新世の沖積層であり、縄文海進以降に形成されたものである。さらに深部は調査していない。

泥炭・河川堆積物の上に遺物包含層は堆積せず、社会福祉法人緑ヶ岡学園の南にひろがる更新世段丘（声間大沼丘陵）は調査区域に延長しないことを確認した。したがって、今回の調査区全域は縄文海進最盛期以降の湿原堆積物の上にあるといえる。同学園内で過去に採集されたという遺物は、声間大沼丘陵の一部から供給された土砂中に含まれていた可能性がある。そのため、南西に位置する段丘上の縁辺部に遺跡が保存されている可能性はある。過去の採集遺物は未見であり、遺跡の時期や性格については不明である。声間大沼丘陵には主として擦文期の集落群がひろく分布することが知られている。それらとの関係性など、追跡調査が必要となる。

(福田正宏)

## V 恵北1遺跡の調査結果

### 1. 遺跡の位置と調査の経過

恵北1遺跡は、稚内市大字声間村字下声間 1465-1・6 に所在し、幕別丘陵（「恵北層」：更別グループほか 1966）が北西方向へ舌状に張り出した先端部に位置する（第1図 13、第3図参照）。北に 1.67km 離れて宗谷湾を臨み、稚内市街地から東南約 12km にひろがる低地帯に向かって岬状に突出した台地上の遺跡である。遺跡からは、急峻を介して大沼を臨み、メグマ沼、声間川、ウツナイ川、加えて現在は稚内空港を一望することができる。

この台地一帯には擦文期の竪穴住居が十数軒分布して集落が形成されていたと考えられており、昭和42（1967）年と昭和43（1968）年に竪穴住居3軒の発掘調査が実施されている（大場・菅 1972）。この調査は、稚内市教育委員会が中心となり実施された。北海道大学の長瀬利夫が発掘担当者となり、同教育委員会および稚内市役所関係者ほか、稚内郷土研究会、声間郷土史研究会、恵北青年会、稚内高等学校などが参加した。航空自衛隊稚内分屯地や地元建設業者らとの協力体制がとられており、官民学連携による発掘調査であったことがわかる。本遺跡は、初年度調査が実施された3ヶ月後にあたる昭和42（1967）年12月、オンコロマナイ2遺跡やシュプトー遺跡などとともに、市の指定文化財に指定されている。地域にとって極めて関心が高く、重要な調査であったといえる。

報告によると、竪穴住居は深さ 40～80cm、一辺の長さが 4～5m の方形をなし、南側に煙道を有する窯がある。1号と3号の床面中央には炉、1号の東壁には出入口が設けられる（大場・菅 1972）。今回の調査の結果、段丘先端頂部（標高 30～38m 前後）が周知の包蔵地範囲内となり、その北西部となる相対的に高い地点（標高 34～38m 前後）に、宇田川編年による擦文中期～後期に形成された集落址がひろがることが判明した。

本遺跡ではほかに、北筒式土器も少量出土したと報告されている。擦文集落とは別の地点に縄文時代の包含層が残る可能性がある。そこで、集落から 40～100m ほど南東方向に離れた相対的に低い地点（標高 30m 以上）に計7カ所のテストピット（TP：各 1m×1m）を設定した。

背丈以上のクマザサが密生していたため、草刈り機を導入して下草を刈りながら、GPS による標高測量と表面観察による地形判読を行い、調査可能地点に TP-1～TP-7 の各テストピットを適宜設定した。そのため、テストピットの位置関係に統一的な基準はない。

調査の結果、TP-1 で遺構と遺物包含層、TP-3 で遺構を発見した。TP-1 では、ピット1が検出された。北筒式土器（トコロ6類）の破片と黒曜石の石器類がともない、縄文中／後期の遺構があるといえる。細粒砂主体の包含層より下部の掘り下げを行ったが、他時期のものと判断できる遺物は出土しなかった。一方、TP-3 では小型の地床炉（炉1）が検出され、擦文土器片1点が出土した。擦文期の生活痕跡の可能性はあるが、ほかに時期判断可能な遺物はない。また、TP-1 と TP-3 の遺構検出面はほぼ同レベルにあるが、同一時期の遺構群であるか否かは不明である。

調査区域の現況は樹木や背丈以上のクマザサが密生しており、立ち入りが極めて困難な状況にある。そのため、包含層の分布範囲や遺構の性格などの詳細については、追跡調査することができなかった。

（福田正宏・斉藤謙一）



第3図 恵北1遺跡周辺の地形図（等高線は2m間隔）

## 2. テストピット調査結果

### (1) TP-1 (第4図)

#### 層序と遺構

TP-1では、標高30.8m前後からGL-0.8mまで掘り下げを行い、以下の層序を確認した。

0層：芝土

1層：黒褐色砂質土 腐植土まじり。植物攪拌の影響を強く受ける

2層：黒褐色細粒砂 遺物包含層。黒曜石製チップ、土器片が少量出土。植物攪拌の影響を一部に受ける

3層：暗褐色細粒砂 小ピット。上部は植物攪拌の影響あり

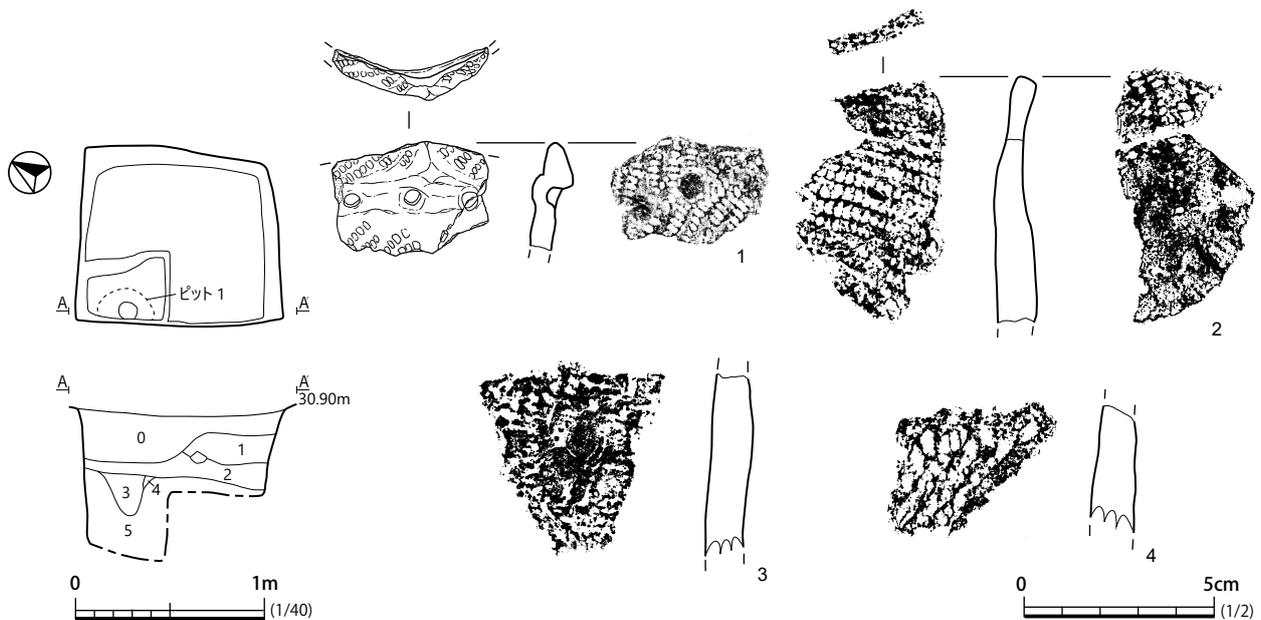
4層：暗灰褐色細粒砂 遺物なし

5層：暗褐色細～中粒砂 遺物なし。上面は遺構確認面

5層上面(標高30.4m前後)で、掘り込み面をもつ小ピット1基(ピット1)の存在を確認した。ピット1の口径は0.22m、底径は0.07m、深さは0.22m、平面形はおそらく円形である。4層はこのピットにともなう層である。ピット1は、その大きさから柱穴の可能性もある。また、遺物を含む2層はピット1直上の遺構埋土の可能性もある。住居址などの生活遺構の一部か。ただし2層・3層ともに、上部からクマザサ根による植物攪拌の影響を受けており、調査範囲を拡張した追跡調査は行っていない。そのため、性格に関する詳細は不明である。淘汰のよい細粒砂が主体となる5層は発掘停止線以下にも堆積するが、そこから遺物や人為活動痕は確認されなかった。以上を確認してから、TP-1の埋め戻しを行った。(福田正宏・張 恩恵)

#### 遺物

TP-1からは、土器片21点と数点のフレイクとチップが出土した。第4図1は口縁部片であり、黒曜石製の剥片・チップをともなう小ピット(ピット1)から出土した。上部に幅の狭い肥厚帯、その直下に刺突(OI)による円形文がめぐり、外面と内面に回転縄文が施されている。この特徴は、朝日トコロ貝塚の第6類土器(駒



第4図 恵北1遺跡 TP-1 遺構図および出土遺物

井編 1963) を標式とする北筒式・トコロ 6 類にみられるものである。口縁部突起を含む破片であり、円形文は外側からやや斜め上方向に刺突され、内側は突瘤文となる。胎土には繊維の混入が認められる。焼成は良好、色調は淡褐色である。同図 2 は緩やかな山形突起をもつ口縁部を含む破片であり、北筒式土器の範疇に含まれると考えられる。口縁部は器厚が薄く、外面と内面、そして口唇部に回転縄文が施されている。同図 3・4 はともに縄文が施された胴部片であるが、型式は特定できない。その他の土器片は 2.0cm 角未満の細片であり、縄文が施されるものもある。フレイクとチップの石材はすべて黒曜石である。 (萩野はな)

## (2) TP-3 (第 5 図)

### 層序と遺構

TP-3 では、標高 31.1m 前後から GL-0.65m まで掘り下げを行い、以下の層序を確認した。

0 層：芝土

1 層：暗褐色細粒砂 腐植土まじり。植物攪拌の影響を強く受ける

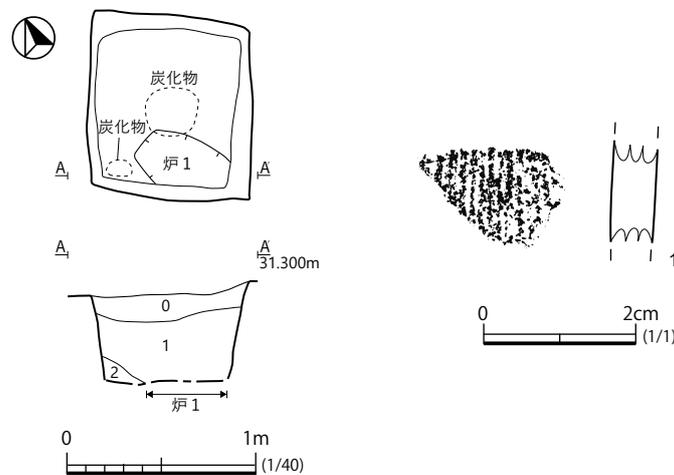
2 層：黒褐色細粒砂 下部に炭化物を多量に含む。遺構直上層

2 層の下面 (標高 30.45m 前後) から、焼土の広がりが見出された。焼土の周辺には炭化物が散乱しており、地床炉の可能性はある (炉 1)。調査範囲内で確認された長軸は 0.48m、短軸 0.33m である。平面形は不整楕円形か。炉検出面から擦文土器片が出土した。擦文期の遺構の一部の可能性はあるが、時期の特定には至っていない。遺構の存在を確認・記録してから、TP-3 の埋め戻しを行った。 (福田正宏・西村広経)

### 遺物

TP-3 からは、土器片 1 点と礫 1 点が出土した。第 5 図 1 は、地床炉検出面から出土した、表面にハケメをもつ擦文土器の胴部片である。大きさ約 1.5cm×2.0cm、器厚約 0.5～0.6cm である。周囲が著しく摩耗しており、遺存状態は悪い。色調は外面が暗褐色、内面が黄褐色である。礫は約 7.0cm×6.0cm×2.5cm の大きさを持ち、石材は頁岩である。二つに割れた状態で出土したが、被熱はしていない。ほかに石器類は出土していない。

(萩野はな)



第 5 図 恵北 1 遺跡 TP-3 遺構図および出土遺物

**引用文献**

大場利夫・菅 正敏 1972 『稚内・宗谷の遺跡（続）』 稚内市教育委員会

駒井和愛編 1963 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 上巻』 東京大学文学部

更別グループ・藤 則雄・朝比奈正二郎 1966 「稚内・サロベツ地域の第四系」『第四紀研究』 5-1、1-11 頁

## VI シュプントー5・6遺跡の調査結果

### 1. 遺跡の位置と調査の経過

シュプントー5遺跡・シュプントー6遺跡は、稚内市大字声間村字声間 6899-1 に所在する。大沼の北西側に接する段丘（「声間層」：更別グループほか 1966）の湖岸に面した南東斜面にあり、目前には大沼周辺の湿地帯がひろがる（第1図 30・31、第6図参照）。丘陵頂部となる市道声間更喜内線（通称ミルクロード）沿いに、ミルクロード展望台駐車場（ミルクパーキング）が設置されている。そこから市道をわたると、大沼湖岸に向かって段丘傾斜面を下る散策路が敷設されている。周知の包蔵地範囲は、その散策路付近となる段丘下部（標高 10～20m 前後）の緩斜面にひろがっている。段丘斜面全体は現在、保安林となっており、保健保安林および干害防備保安林保安林として機能している。

1998（平成 10）年に本遺跡の周辺で、北海道による植林事業があった。その際に笹地の抜根が行われ、稚内市教育委員会の立会調査によって、剥片石器や石器製作残滓の散布が確認された。段丘下部は、二つの深い谷地形によって分断され、西から順にシュプントー4遺跡、同5遺跡、同6遺跡として登録されている。今回は、シュプントー5遺跡と同6遺跡の包蔵地範囲内とその周辺において試掘調査を行った。

背丈ほどのクマザサが密生していたため、草刈り機を導入して下草を刈りながら、表面観察による地形判読を行い、調査可能地点に TP-1～TP-12 の各テストピットを適宜設定した。そのため、テストピットの位置関係に統一的な基準はない。

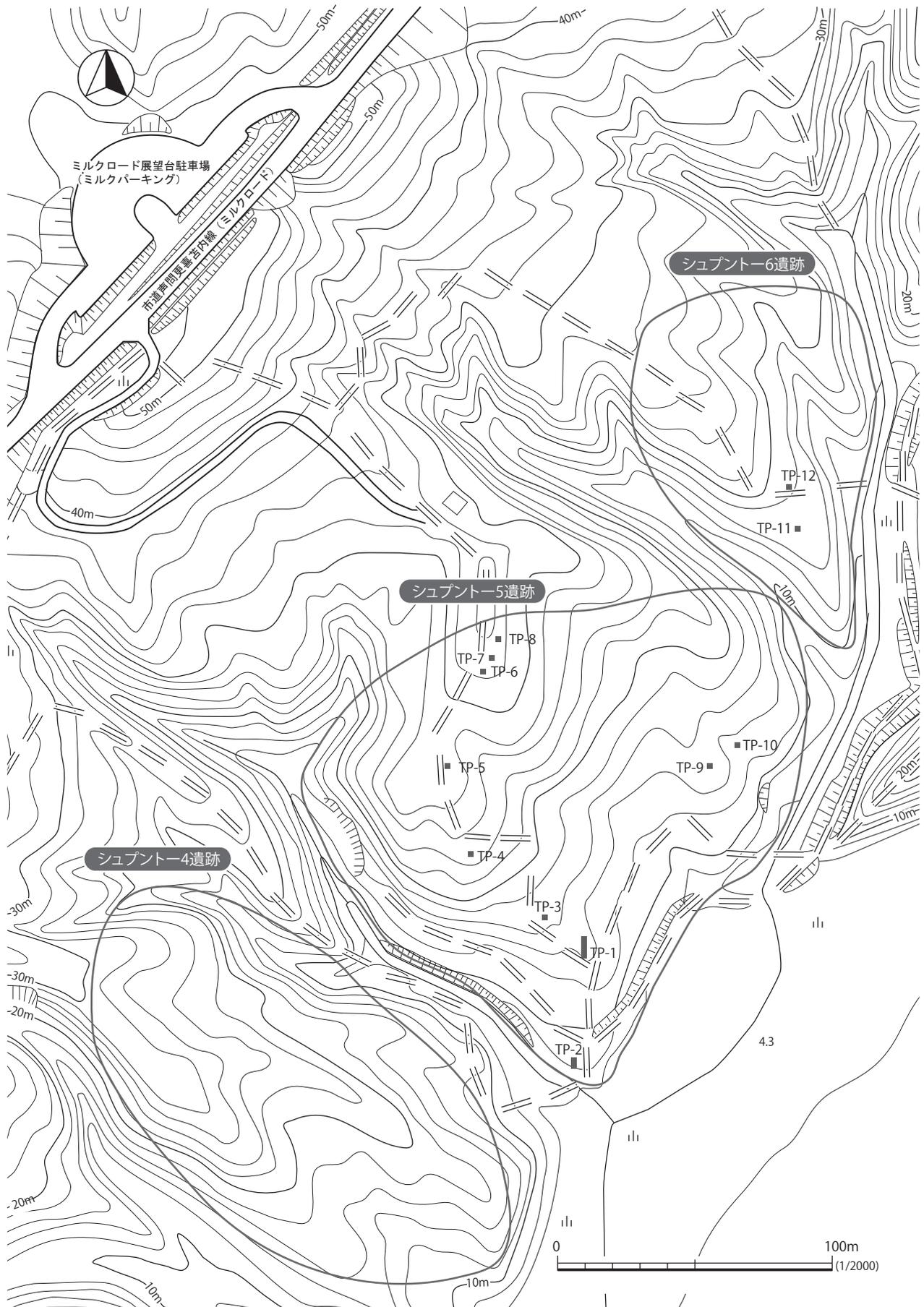
シュプントー5遺跡では、標高 10～30m 前後の斜面上を調査した。遺跡をほぼ縦断する散策路の周辺に点在するテラス状地形に計 10 カ所のテストピット（TP-1～TP-10：各 1m×1m）を設定した。

調査の結果、標高 8～14m 前後となる緩斜面に設定した TP-1 と TP-2 で遺物包含層を発見した。斜面傾斜に直交するように TP-1 を 1m×4m に拡張したところ、多量の黒曜石製の石器製作残滓が平面分布することを確認した。包含層は樹木根由来の植物攪拌の影響を受けており、全体的に焼けていた。石器製作後に樹木根が発達し、その後、火を受けた可能性がある。周囲のテストピットで焼土などの存在は確認されていない。また TP-1 は散策路に接するため、調査区をそれ以上拡張しなかった。そのため、ここでみつかった被熱痕が人為によるものか否かは不明である。TP-2 では、数点の剥片石器と多数の石器製作残滓（ともに黒曜石製）が出土し、また、接合可能な数点の北筒式土器胴部片が出土した。TP-2 は TP-1 より一段低い平坦面にあり、ともに明確な遺構プランは確認されていない。そのため現時点において、両地点の包含層を直接関連づける根拠はない。ほかに TP-9 では、黒曜石製製作残滓 1 点が出土した。これに関しては、原位置ではなく、斜面上部から流れ込んできた可能性がある。

シュプントー6遺跡では、標高 17～18m 前後のテラス状地形で計 2 カ所のテストピット（TP-11、TP-12：各 1m×1m）の調査を行った。ともに包含層の存在は確認されず、GL-0.6～0.7m まで粘土層を掘り下げた時点で湧水を確認した。シュプントー5遺跡の TP-1 や TP-2 が分布する斜面とは、堆積環境が異なっている。

（福田正宏）

VI シュプントー5・6遺跡の調査結果



第6図 シュプントー5・6遺跡周辺の地形図 (等高線は2m間隔)

## 2. テストピット調査結果（シュプントー5遺跡）

### (1) TP-1（第7図）

#### 層序

TP-1では、標高10.3m前後からGL-0.35mまで掘り下げを行い、以下の層序を確認した。

0層：芝土

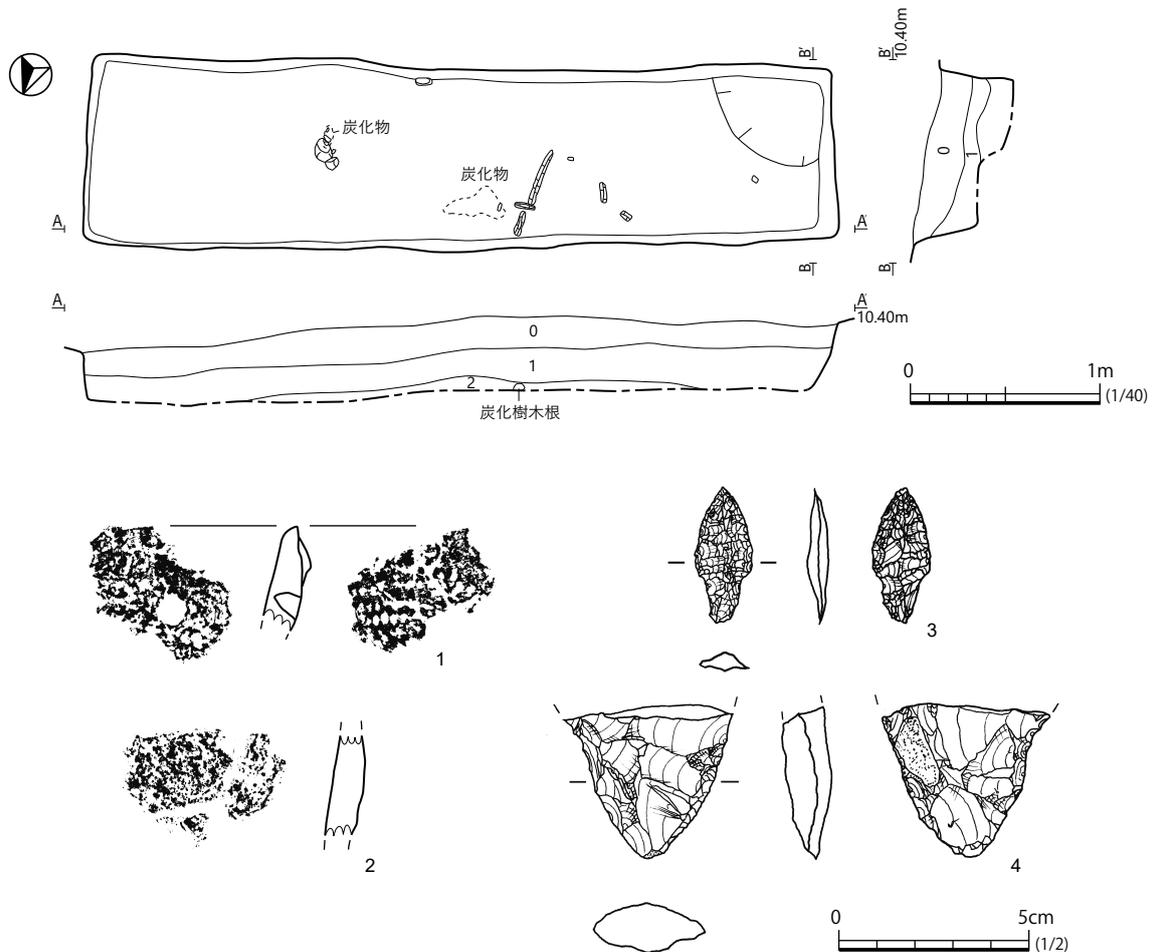
1層：黒褐色粘質土 植物攪拌の影響を強く受ける。下部は2層のローム質土を巻き上げる

2層：暗褐色ローム質粘土 遺物包含層。焼土粒を多量含む。植物攪拌の影響が大きい

2層中で掘削を停止したが、サブトレンチを入れ、掘削停止面から少なくとも0.3m下位まで2層が堆積することを確認した。南西角でピット状の植物攪拌痕が検出され、そのなかから少量の土器片や立った状態の多数の黒曜石製チップ類が出土した。北壁側では炭化した樹木根が伸び、その周囲には黒曜石チップが散乱していた。以上を確認してから、TP-1の埋め戻しを行った。 （福田正宏・西村広経）

#### 遺物

TP-1からは、土器片5点と剥片石器、砥石、多量のフレイク・チップが出土した。第7図1は北筒式・トコロ6類土器の口縁部片であり、ピット状の植物攪拌のなかから出土した。上部には肥厚帯の一部、その下に刺突（OI）による円形文がみられるが、内側には突瘤文がない。外面と内面に回転縄文が施されている。胎



第7図 シュプントー5遺跡 TP-1 遺構図および出土遺物

土には少量の繊維の混入が認められ、色調は外面が暗褐色、内面が褐色である。同図2は無文土器の小片である。色調は外面が赤褐色、内面が褐色である。胎土には砂が多量に含まれている。北筒式土器とは異なる型式の可能性が高い。その他の土器片には縄文が施文されたものも含まれるが、すべて小片であり型式を特定することは困難である。

石器は、多量のフレイク・チップ、数点の剥片石器、砥石1点が出土した。フレイク・チップ類の石材は、チャート1点を除き、すべて黒曜石である。第7図3は完形の有茎石鏃で、長さ3.6cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ2.0gである。両面調整が施され、基部は大きく作り出されている。折損部がなく、未使用品とみられる。同図4は石槍の未成品で、長さ4.0cm、幅4.5cm、厚さ1.2cm、重さ18.8gである。3・4ともに黒曜石製である。砥石は砂岩製で、約19.0×5.0×8.0cmの略直方体形を呈している。遺存状態が悪く、図化していない。全面に擦痕がみられるが、凹面をなす2面が顕著に使用されている。(萩野はな・福田正宏)

(2) TP-2 (第8図)

層序

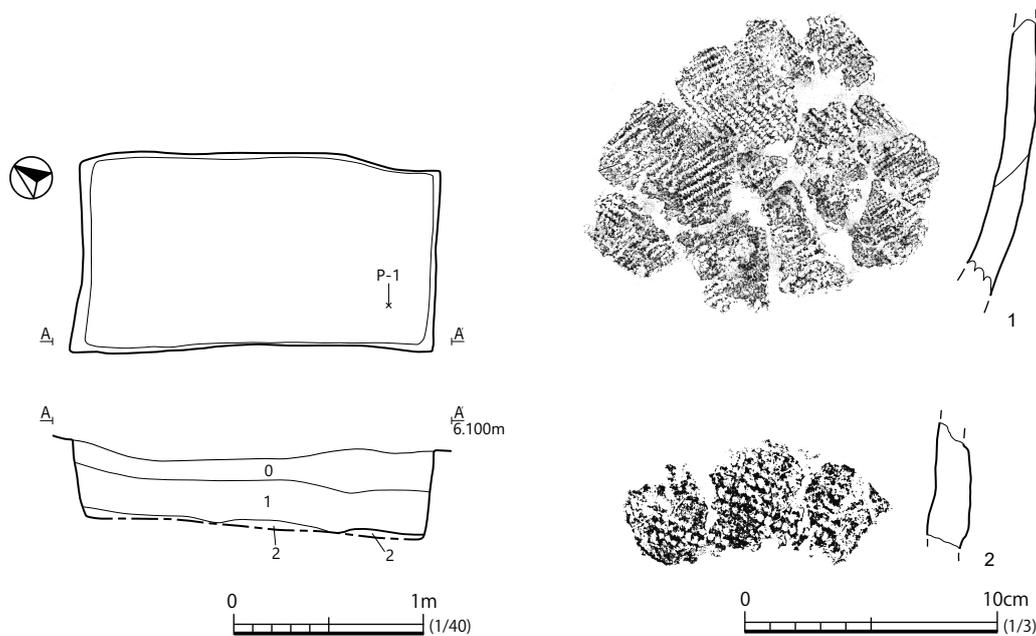
TP-2では、標高5.9m前後からGL-0.4mまで掘り下げを行い、以下の層序を確認した。

0層：芝土

1層：黒褐色粘質土 2層から巻き上げたロームブロックを少量含む。植物攪拌の影響を受ける

2層：暗褐色ローム質粘土 遺物包含層。炭化物をまばらに含む

2層中で掘削を停止した。サブトレンチ調査を行い、掘削停止面より少なくとも0.3m以上下位まで2層が堆積することを確認した。これは、TP-1と類似する堆積である。以上を確認してから、TP-2の埋め戻しを行った。(福田正宏・西村広経)



第8図 シュプントー5遺跡 TP-2 遺構図および出土遺物

## 遺物

TP-2からは、土器片6点と多量のフレイク・チップが出土した。土器片の大半が小片である。第8図1は平面的にまとまって出土した胴部片を接合したものであり、北筒式土器であると考えられる。出土位置は同図の左上平面図にP-1で示した。外面には結節や結束のない羽状縄文が施文されており、RL縄文はその上下のLR縄文と異なる原体をもつ。胎土には繊維や細礫を含み、焼成はあまり良くない。胴部片の下半にはコゲが付着している。胴部片のみであるため詳細な型式は特定できないが、胎土の繊維と結節や結束のない羽状縄文が特徴的である。同図2は回転縄文が施された胴部片であり、器壁が約1.4cmと厚手である。胎土には細礫が混入しており、焼成はあまり良くない。色調は外面が赤褐色、内面が褐色である。

大沼周辺では過去にも調査が行われ、複数の遺跡で北筒式土器が確認されている。恵北1遺跡や大沼遺跡（旧シュプントー遺跡）では、少量の北筒式土器片が擦文集落の発掘調査時に出土している（大場・菅1972）。ほかにも声問大曲遺跡、声問小学校周辺竪穴群、声問大沼丘陵第1～第7遺跡や恵北2遺跡で北筒Ⅱ式土器（トコロ6類・トコロ5類）が出土したとされている（右代1999）。これらの土器型式を再検証する必要があるが、今回出土した土器も同時期のものである可能性が高い。

石器は、多量のフレイク・チップ類と、数点の剥片石器（未製品）が出土した。石英質石材のフレイクが1点あるが、それ以外はすべて黒曜石製である。肉眼観察したところ黒曜石の大半は道東産であるとみられるが、石質の特徴が異なるものも混在している。原産地推定分析は行っていないが、シュプントー5遺跡では複数の原産地から石材が供給された可能性がある。これは、恵北1遺跡とは異なる特徴である。（萩野はな）

## 引用文献

右代啓視 1999 「第一章 先史文化の時代」『稚内市史 第二巻』 稚内市 59-107 頁

大場利夫・菅 正敏 1972 『稚内・宗谷の遺跡（続）』 稚内市教育委員会

更別グループ・藤 則雄・朝比奈正二郎 1966 「稚内・サロベツ地域の第四系」『第四紀研究』 5-1、1-11 頁

## Ⅶ まとめ

令和元（2019）年10月9日から同月16日まで、北海道宗谷地方における縄文遺跡群の実態把握を目的とした学術調査を実施した。今回は、北海道稚内市声問地区およびその周辺に所在する恵北1遺跡、シュプントー5遺跡、同6遺跡、声問大沼丘陵第10遺跡において、性格および包含層分布範囲を把握するための試掘調査を実施した。

調査の結果、恵北1遺跡とシュプントー5遺跡には縄文中／後期（北筒式期）の遺物包含層と遺構が比較的良好な形で保存されていることを確認した。ともに集落遺跡である可能性が高く、今後遺跡範囲を確定していくことが必要となる。一方、声問大沼丘陵第10遺跡では、包含層の所在は確認されていないが、周知の遺跡包蔵地範囲の背後にひろがる声問大沼丘陵上の北縁部に未知の包蔵地が存在する可能性がある。今後、その地点の開発にあたっては注意を要する。

今回の調査対象遺跡群を含め、稚内大沼周辺の縄文中／後期の遺跡群は、河川や湖沼に面した更新世段丘縁辺部の比較的平坦な位置に立地する、という傾向がある。当時の大沼にあった内湾環境を見下ろす、居住または陸域活動拠点に適した地点が選択されたといえる。これと類似した地形は、ほかにもある。とはいえ、本地区では掘削をともなう開発事業が少なく、また、段丘表面の大部分にクマザサが密生しているため、現状では地表面の露出箇所が限られている。宗谷湾周辺の縄文遺跡群の分布を適切に理解するためには、遺跡発見を困難にしている、そうした現況に関しても考慮する必要がある。

今回の現地調査、整理作業、また報告にあたり、日露両国の多くの方々からご協力をいただいた。とくに斉藤譲一氏をはじめ稚内市教育委員会のみなさまには、調査計画の段階から整理報告に至るまでの過程で、多大なるご支援をいただいた。最後に記して感謝の意を示したい。

（福田正宏）

# SUMMARY

## **Purpose of the investigation**

The Soya region, including the area of Wakkanai City, located in the northern tip of Hokkaido, occupies an important place when considering the history of cultural interaction between the island of Hokkaido and the island of Sakhalin during the Quaternary period from the Paleolithic to the Ainu eras. However, only fragmentary information has been collected about archaeological sites in the Soya region, especially the Jomon/Neolithic sites. Since 2001, the University of Tokyo Department of Archaeology and the Tokoro Research Laboratory have been studying prehistoric cultural interaction around the Mamiya/Tatar Strait (Hokkaido, Sakhalin and the Lower Amur basin), through a joint Japan-Russia research project involving the Khabarovsk Regional Museum and Sakhalin State University. Therefore, in parallel with the research being conducted on the Neolithic sites at Sakhalin, we started an investigation of Jomon period sites in Wakkanai City, which is the closest city to Sakhalin Island.

The excavations were conducted at Koetoi-onuma-kyuryo 10 site, Keihoku 1 site, Shupunto 5 site and Shupunto 6 site from October 9 to 16, 2019. The project was directed by Dr. Masahiro Fukuda (Department of Archaeology, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo) with support from the JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (B).

## **Koetoi-onuma-kyuryo 10 Site**

Seven test pits (each measuring 1 m<sup>2</sup>) were excavated. Most of them showed peat and river sediments under the additional soil added by modern land formation of 5.5 m to 6.1 m in elevation. The peat and sediments is the alluvium of the Holocene, which were formed after the phase of Jomon transgression. There was no cultural layer above the peat and sediment layers. The artifacts that were collected around this area in the past could have been contained in landslide from the terrace to the south.

## **Keihoku 1 Site**

Seven test pits (each measuring 1 m<sup>2</sup>) were excavated. At TP-1, a small pit (Pit 1) was exposed. Since fragments of Hokuto (Tokoro-6-rui) type pottery and obsidian stone flakes and chips accompanied it, this could have been an arrangement of a feature belonging to the Middle/Late Jomon period. There were no artifacts from other periods. At TP-3, a small hearth (Hearth 1) accompanied with a Satsumon-type pottery fragment was found. This might be a trace of activity by occupants during the Satsumon period; however, there were no other artifacts to provide conclusive proof of the period. Although the features found in TP-1 and TP-3 are almost at the same level, it is uncertain whether they belong to the same chronological phase.

## SUMMARY

### Shupunto 5 Site and Shupunto 6 Site

At the Shupunto 5 site, ten test pits (TP-1: 4 m<sup>2</sup>, TP-2: 2 m<sup>2</sup> and TP-3~10: 1 m<sup>2</sup>) were excavated. A cultural layer was found in TP-1 and TP-2, which was positioned on a gentle slope of about 8 to 14 m in elevation. TP-1 showed a great deal of debris from obsidian stone tool production in a planer distribution. The cultural layer was post-disturbed by the roots of trees and burnt, but it was not clear whether this was related to human activity. At TP-2, a few stone flakes and a lot of debris (both obsidian), and some body-part sherds of Hokuto-type pottery were recovered. TP-2 was positioned on a flat terrace surface slightly lower than TP-1, but no features were unearthed. Thus, there are no reasons to draw a connection between the archaeological contexts of each test pit. At the Shupunto 6 site, two test pits (each measuring 1 m<sup>2</sup>) were excavated on a terrace-like surface of about 17 to 18 m in elevation. Neither of them had any archaeological sediment and spring water came out from 0.6 to 0.7 m underground. Here, the sedimentary condition is different from the slope where TP-1 and TP-2 of the Shupunto 5 site were positioned.

### Conclusion

From the investigation, it was confirmed that cultural layers and features of the Middle/Late Jomon (Hokuto type) period were preserved at the Keihoku 1 site and the Shupunto 5 site. Since they have a high possibility to be settlements, it is necessary to determine the extent of the sites. With regard to the Koetoi-onuma-kyuryo 10 site, the result implies the existence of an unknown cultural property on the northern terrace of Koetoi-onuma Hill (*Kyuryo*). In conclusion, the sites of the Middle/Late Jomon period around Lake Onuma in Wakkanai City, tend to be located on the edge of a Pleistocene terrace that is relatively flat and facing a river or a lake. However, there could be more sites that have not yet been discovered due to the few modern development projects and the thick growth of striped bamboo (*Sasa veitchii*). It is necessary to consider these matters in order to understand the distribution of the Jomon sites in the Soya Bay area.

1 恵北1遺跡 TP-1  
南西壁セクション  
(北東方向から撮影)



2 恵北1遺跡 TP-3  
炉検出状況  
(北東方向から撮影)



3 シュブントー5遺跡 TP-1  
全景  
(東方向から撮影)



PLATE 2



4 シュプントー5遺跡 TP-1  
北壁セクション  
(南方向から撮影)



5 シュプントー5遺跡 TP-2  
南西壁セクション  
(北東方向から撮影)



6 シュプントー5遺跡 TP-2  
土器出土状況 (P-1 地点)

# 報告書抄録

ふりがな	とうほくあじあにおけるおんたいせいしんせつきぶんかのほつぼうかくだいてきおのうのげんかい (I)							
書名	東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界 (I)							
副書名 1	北海道宗谷地方における縄文時代遺跡群の実態調査2019年度成果報告書							
副書名 2	日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究成果報告書							
シリーズ名	東京大学常呂実習施設研究報告							
シリーズ番号	第17集							
編著者名	福田正宏・萩野はな							
編集機関	東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室							
所在地	〒113-0033 東京都文京区本郷7-1-3							
発行年月日	2020年4月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
こえといおおぬまきゅうりょう 声間大沼丘陵 だい10いせき 第10遺跡	わっかないしおおあざこえといむらあざ 稚内市大字声間村字 しもこえとい986-2, 4067-1, 6898-3 下声間986-2, 4067-1, 6898-3	01214	H-01-134	45° 23' 48"	141° 45' 45"	2019.10.9~ 2019.10.16	7	学術研究
けいほく1いせき 恵北1遺跡	わっかないしおおあざこえといむらあざ 稚内市大字声間村字 しもこえとい1465-1・6 下声間1465-1・6	01214	H-01-009	45° 23' 28"	141° 47' 59"	2019.10.9~ 2019.10.16	7	学術研究
しゅぶんとー5いせき シュブントー5遺跡	わっかないしおおあざこえといむらあざ 稚内市大字声間村字 こえとい6899-1 声間6899-1	01214	H-01-128	45° 23' 26"	141° 44' 28"	2019.10.9~ 2019.10.16	14	学術研究
しゅぶんとー6いせき シュブントー6遺跡	わっかないしおおあざこえといむらあざ 稚内市大字声間村字 こえとい6899-1 声間6899-1	01214	H-01-129	45° 23' 29"	141° 44' 31"	2019.10.9~ 2019.10.16	2	学術研究
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
声間大沼丘陵第10遺跡	散布地					なし		包含層未確認
恵北1遺跡	集落跡・散布地	縄文、擦文		小ピット、地床炉		土器片、石器		北筒式、擦文式土器片を発見
シュブントー5遺跡	集落跡・散布地	縄文		石器製作残滓集中		土器片、石器		北筒式土器片を発見
シュブントー6遺跡	散布地					なし		包含層未確認
要約	北海道稚内市の大沼周辺に分布する計4遺跡で発掘調査を行った。声間大沼丘陵第10遺跡では7カ所のテストピットを設定した。標高6.1~5.5mの造成土の下に泥炭や河川堆積物が存在することを確認したが、その上に遺物包含層は堆積しなかった。恵北1遺跡では遺構（ピット1）が検出された。北筒式土器（トコロ6類）の破片と黒曜石製石器類がともなった。別のテストピットでは、小型の地床炉（炉1）が検出され、擦文土器片が出土した。擦文期の遺構の可能性はあるが、時期は特定できていない。シュブントー5遺跡では2カ所のテストピットで遺物包含層を発見した。いずれも多量の黒曜石製の石器製作残滓が出土し、数点の剥片石器・土器片がともなう。シュブントー6遺跡では、2カ所のテストピットを設定したが、包含層の存在は確認されなかった。							

---

---

東京大学常呂実習施設研究報告 第17集

東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界（Ⅰ）  
—北海道宗谷地方における縄文時代遺跡群の実態調査 2019年度成果報告書—

---

2020年4月15日

編集 福田 正宏・萩野 はな  
発行 東京大学大学院人文社会系研究科  
考古学研究室  
東京都文京区本郷7-3-1  
附属北海文化研究常呂実習施設  
北海道北見市常呂町字栄浦 376  
印刷 株式会社イセブ  
茨城県つくば市天久保2-11-20

---

---